

『続の原』輪講 発句

二〇一四年（平成二六）七月一九日の例会にて発表

担当 早稲田大学大学院・木下優

○春13番の発句

風かぜなくてけうとき岸かしの柳やなぎかな哉

勇招ゆうしょう

〈作者について〉

生没年ほか未詳。『続の原』（貞享五）には、本句を含めて発句編に六句入集。ほか、『東日記』（延宝九）『其袋』（元禄三）等に入集している。

〈語注〉

・「柳」によって、春。『毛吹草』『増山井』などに一月、『初学抄』に二月と記載。
・けうとし さびしいの意。「山鳥もけうとき闇の木立かな」（続虚栗）「けうときは驚の栖や雲の峰」（炭俵）のように、鳥と共に詠んで寂しげな情景を形容する際に用いた例が見られる。本句は柳に対して「けうとし」と表現した点が特徴的である。
・岸の柳 「岸の柳」は和歌に多く例が見られ、「はつせ川なびく玉藻はみがくれて岸の柳に春風ぞ吹く」（壬二集）「風になびくみむろの岸の柳陰下行く水は色ぞのどけき」（夫木和歌抄）のように、柳は風を受けてゆるやかになびく景が賞美されてきた。本句では逆に、静止する柳を詠んだ点が新しい。

〈句解〉

「風がなくてさびしげな岸の柳であるよ」
静止する柳と、それを「けうとし」といった俳言によって形容したところが特徴的である。

本句と12番句は、貞享版と文政版で配列が入れ替わっている。
貞享版では、11番「おもひ出て物なつかしき柳かな」の後に、本句は置かれている。「なつかしき」と親しみのこもった柳の後に「けうとし」と否定的な形容を用いた句を配した並びとなり、「けうとし」の語がより引き立つ配列になっている。
文政版で、12番「青柳の雫に星の歩み哉」と入れ替えたのは、風に吹かれる柳を詠んだ14番の句との対比を優先したとも推測される。

○春14番の発句

角田川にて

舟ふねしばし風かぜを誉ほめたる柳やなぎかな哉

不卜ふぼく

〈作者について〉

生年不明。元禄四年没。六十余歳か。岡村氏。通称、市郎右衛門。別号一柳軒。江戸の人。未得門。万治元年『捨子集』に初出。以後、江戸俳壇で活躍。重頼・立圃・蝶々

子・梅盛・露沾・幽山・言水・似春や芭蕉・素堂らとも広く交わった。『続の原』の他、『俳諧江戸広小路』『俳諧向之岡』を編著。

〈語注〉

・「柳」によって、春。
・角田川 隅田川。京の賀茂川に匹敵する東都の川として意識され、生活に密着した身近な河川であった。『陸奥衛』（元禄十年）に、八匡の句「花盛柳の道や隅田川」がある。
・舟しばし 舟をしばらく停めて、の意。句例なし。和歌には、「諏訪の湖風うみ間急ぐと舟しばし木曾路の峰にほととぎす鳴く」（桂大納言入道殿御集）（江戸時代写）「ほととぎす戸端の裏に来鳴くなり沖の伴舟しばしやすらへ」（檜葉和歌集）（嘉禎三年）のように、停泊する舟にほととぎすの声を聞く情景を取り合わせた例が見える。
・風を誉たる これより後になるが、風を誉めた句には、次の例がある。
先風をほめて舟こぐすみかな 桃妖『草庵集』（元禄十三年）
一番に風をほめたる座敷かな 水翁『俳諧新撰』（安永二年）
避暑の意味で風を誉める意となっており。本句の風を誉める意味合いとは異なる。

〈句解〉

「舟をしばし停めて風を感じる柳であるよ」
舟をしばらく停めて、心地よい春風に柳がそよいでいる情景を愛でた句。風を誉めている舟上の人物は、船頭か、あるいは遊興に訪れた人物が想定される。
配列は、13番句が静止する柳であったのに対し、14番句は風に揺れる柳となっている。

○春15番の発句

青柳あおやぎや片沓かたくつゆるむ馬上ばじょうかな

調義

〈作者について〉

生没年ほか未詳。『続の原』（貞享五）に本句一句のみ入集。

〈語注〉

・「青柳」によって、春。『増山井』「柳」の項に「あをやなぎ」を迸出。
・片沓 片方のくつ。ここでは足全体を覆う履き物ではなく、下駄や足駄を指すと思われる。句例なし。

〈句解〉

「青柳であるなあ。（私の）片方の沓がゆるんでしまう馬上であるよ」
馬に乗って通行していたところ、青柳の美しさについて気を取られて、いつのにか片方の沓がゆるんでいた場面を詠んだものと解した。句例には、「うちぬるや間なく時なく

馬の沓」（時勢粧）「次馬の沓をと高し鞠子川」（物種集）「片そぎの末社は横にこけ給ふ／木に馬つなぎ沓をすげぬる」（誹諧別座敷）のように、馬の沓を詠んだ例は数例見られるが、馬上の人物の沓を詠んだ例は見つからなかった。また、「沓渡しして静まりの音／飛降りて又飛戻る橋の上」（西山宗因千句）のように、謡曲「張良」の場面から取った例も見られるが、本句に関しては、謡曲の面から見ても「青柳」との関連性を見いだすことが出来なかった。

配列は、12番句が「舟」を詠んだのに対して、本句は「馬」を詠んでいる。交通手段として一般的だった二者が並んでいる。

○春16番の発句

削りかけ燕のおとす軒端かな

立些

〈作者について〉

生没年ほか未詳。『誹諧当世男』（延宝四）『江戸通町』（延宝六）等に入集。『続の原』（貞享五）には本句を含めて発句編に十句入集している。

〈語注〉

・「燕」によって、春。晩春に南方から飛来し、秋には帰って行く。毎年同じ軒端に巢を掛ける。

・けずりかけ 柳などの枝を細く削り、茅花（つばな）の花のような形に作った棒。近世、正月一四日に飾りなわを取払った後、一四日の夕方から邪気を払い福を招くまじないとして、門戸に掛けた。

・軒端 屋根の端、柱壁の外郭から外へ張り出た部分。和歌では、軒を伝い落ちる雨などと詠まれることが多く「をち方の山は夕日の影はれて軒端の雲は雨おとすなり」（風雅集）などの例がある。

〈句解〉

「削りかけを燕が落とした軒端であるよ。」

新年、軒端に掛けた削りかけが、今年も飛来してきた燕によって落ちてしまった。その情景に、季節の移り変わりへの気付きを得た句と解される。

配列は、15番句「青柳」から、16番句「燕」へと春の推移を感じさせる並びとなっている。春16番から燕の句が続くが、本句がその先頭に配置されたのは、「削りかけ」が柳の枝を用いて作られた縁によるものと思われる。

○春17番の発句

我家の奥まで見たる燕哉

比竹

〈作者について〉

生没年ほか未詳。『続の原』（貞享五）の発句編に本句を含めて二句入集。ほか、『いつを昔』（元禄三）に一句入集している。

〈語注〉

・「燕」によって、春。燕が人家に巢を作る景を詠んだ句には、「人の家定まるよりや燕の巢」（時勢粧）「櫛の木の花にかまはぬ姿かな 芭蕉／家するつちをはこぶつばくら 秋風」（野ざらし紀行）などがあるが、家の中に入った燕を詠んだ例は見られない。

〈句解〉

「我が家の中に入り込んで、奥まで見ている燕であるよ」

軒端の外にしか見ることのないはずの燕が、家の中まで入ってきたことに対する驚きを詠んだ句。「奥」という表現を、より抽象的に捉えるならば、外様には見られたくない我が家の事情まで燕には知られてしまっているといったニュアンスを含んでいても解される。

配列は、16番の燕が軒端の燕であったのに対し、17番の燕は「奥」となっていて、より家の中まで入り込み、より生活に密着した「燕」へと繋げている。

○春18番の発句

わが貧^{ひん}をやさしく捨ぬ^{すて}燕^{つばめ}かな

溪石^{けいせき}

〈作者について〉

生没年ほか未詳。『続の原』（貞享五）には本句を含めて発句編に十二句、六吟歌仙に入集。ほか、『猿蓑』（元禄四）『雑談集』（元禄五）等に入集している。

〈語注〉

・「燕」によって、春。

・わが貧を捨てぬ 「人間の用捨は貧富にあり」（太平記）を基にした言葉か。濁世にあると、人が世に用いられるかどうかは、素質・能力によらず貧富によって決まり、貧しい者は捨てられることを意味する。本句は、そんな世にあっても燕だけは我が家を見捨てずにいてくれるというもの。ただし、「燕」が「貧しさ」を表す言葉と共に詠まれた句例は、本句以外に見られない。

〈句解〉

「私の貧しさをやさしく見捨てずにいてくれる燕であるよ」

貧しい我が家は、世の中に見放されてしまったかのように佇んでいるけれども、毎年決まって春に訪れて我が家に巢を掛ける燕だけは、どうやら私を見捨てないでくれているらしい、という感慨を表した。

※「捨てぬ」の「ぬ」について、打消ではなく完了の助動詞と見なし、燕が吉祥を占う鳥

であることから、本句を「私の貧しさをやさしく捨ててくれた燕であるよ」と解釈する可能性も指摘された。

16番・17番に比較して、本句の燕は経年的な、人間と燕の関係を感じさせる句となっている。17番句で「我が家」を詠んだのに対し、18番で「わが貧」が並ぶことにより、我が家の内情が「貧しさ」へと具体化したように読み取られる配列である。